

客観的な評価指標を有する構音検査の開発

中村哲也*、小林マヤ

聖隷クリストファー大学

1. はじめに

英語圏の構音検査では粗点から標準得点や構音の発達年齢などが算出でき、結果が客観的な数値として示される。構音検査が得点化されることで、構音訓練の適応や訓練効果の判定に用いることが可能である。本研究では構音検査の結果を得点化することで客観的な指標を有する構音検査を開発することを目的にパイロットスタディを行った。

2. 方法

- 1) 対象: 保育園に在籍する4歳～5歳代の27名(月齢平均 63.4 ± 3.2 カ月)を対象とした。
- 2) 構音検査: 日本語に存在する20個の子音が基本的に語頭に来る単語の絵カードを呼称させた。なお、発達過程で構音の誤りが多い t, k, s, r については全ての後続母音(aiueo)を含む単語を実施し、語頭と語中で誤り方の傾向が異なる r については語頭と語中の単語を実施した。
- 3) 言語検査: WPPSI の知識、単語、語の推理を実施し VCI を算出した。
- 4) 倫理的配慮: 本研究は聖隷クリストファー大学倫理委員会の承認を得て、事前に保護者より同意書を署名して頂いた上で実施した。対象者の表情・言動等に十分配慮し、心身に負担がみられると判断した場合には速やかに検査を中断・中止するなどの配慮を行った。なお、本研究に関連して開示すべき COI はない。

3. 結果

- 1) 構音検査の採点: 被験児が25%以上呼称できなかった5つの単語を除外し、29の単語を分析対象とした。採点方法は Tamer et al. (2009) の方法に従って、対象の子音が正しく構音できた場合を1点、誤った発音や無反応、誤った語の表出は0点とした。また、複数の単語で評価している子音(t, k, s, r)については各子音の合計点を評価する単語の数で除することにより1点満点に換算した。
- 2) 構音検査の結果と言語検査との相関: 構音検査の平均点は $16.5 \pm 1.7/18$ 点であり、誤りが認められた子音の高い順から r 37%, s 33%, ts 30%, z 30%, k 26%, c 22%であった。また、構音検査の得点は月齢と VCI に中等度の相関を認めた。

4. 考察

今回実施した構音検査の誤りの傾向と先行研究の4歳～5歳の一般的な構音発達について比較すると概ね同じような傾向がみられた。また、構音検査の点数は月齢と WPPSI の VCI との相関も認められ、構音検査の得点は全般的な発達を反映していると思われた。今後は、除外した単語の再検討、被験者数と対象年齢の拡大、検査の妥当性と信頼性について検討が必要である。